# 百人一首への招待

吉海直人
Yoshikai Naoto

CHIKUMA SHINSHO

……多くの古典文学(『源氏物語』もその一つ)と同じく、藤原定家自筆の百人一首原本など現存していません。定家が撰んだということも、確かな証拠があって言われているわけではありません。百人一首に関する常識は、そのほとんどが推測の積み重ねなのです。……

ちくま新書
182

ちくま新書
182

# 百人一首への招待

一九九八年一二月二〇日　第一刷発行

著　者　吉海直人（よしかい・なおと）
発行者　柏原成光
発行所　株式会社筑摩書房
東京都台東区蔵前二-五-三　郵便番号一一一-八七五五
振替〇〇一六〇-八-四一二三
装幀者　間村俊一
印刷・製本　株式会社精興社

ちくま新書の定価はカバーに表示してあります。
ご注文・お問い合わせ、落丁本・乱丁本の交換は左記宛へ。
大宮市櫛引町二-六〇四　筑摩書房サービスセンター
郵便番号三三一-八五〇七
電話〇四八-六五一-〇〇五三
© YOSHIKAI Naoto 1998
Printed in Japan
ISBN4-480-05782-X C0295

¥660-

ちくま新書

# 百人一首への招待

吉海直人
Yoshikai Naoto

# 百人一首への招待【目次】

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

序章　百人一首の基礎知識　007
一、百人一首、常識のウソ　009
二、現代に生きる百人一首　012

第一章　百人一首成立の謎　019
一、『明月記』のあいまいさ　020
二、百人秀歌の発見　027
三、「百人秀歌型配列百人一首」の発見　031
四、小倉色紙の複雑さ　034
五、定家筆の新事実　042
六、歌仙絵の有無　043
七、二つの小倉山荘　049

第二章　百人一首成立以降　053
一、百人一首古注釈のはじまり　054

二、百人一首に古写本はない　058
三、為家筆百人一首はあるか　061
四、百人一首古版本の誕生　065
五、女子用往来への道　070
六、百人一首かるたの謎　072
七、競技用かるたの普及　077

第三章　百人一首の副産物　083
一、異種百人一首の成立　084
二、はかなく消えた愛国百人一首　089
三、パロディになった百人一首　092
四、最初の英訳百人一首　095

第四章　百人一首の撰歌意識を探る　099
一、教材としての危険性　102

二、作者の疑わしい歌　104
三、撰入歌の是非について　108
四、秀歌と代表歌のずれ　113
五、勅撰集との差異　115
六、配列をどう考えるか　120
七、天地人の発見　122
八、定家最後の野望　124

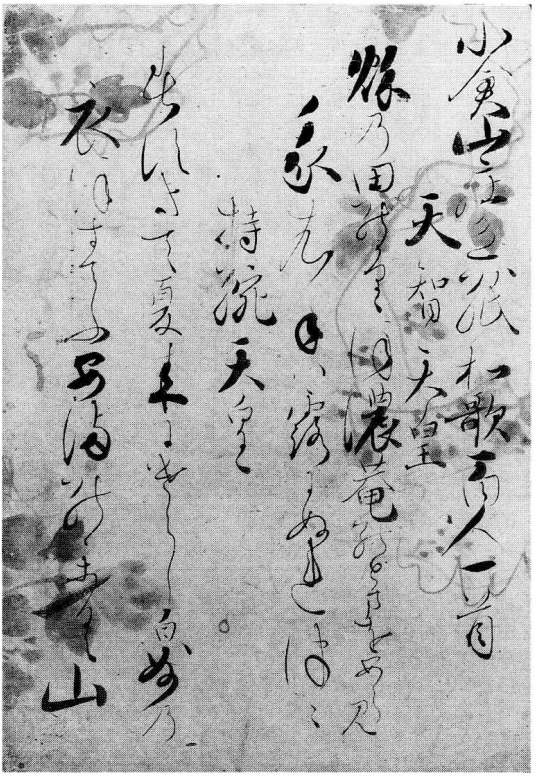
第五章　百人一首の味わいかた　127

付録　百人秀歌掲載歌　205

あとがき　210

参考文献一覧　212

*本文中および章扉に掲載されている図版は、別途記載がないかぎり著者所有のもの



「小倉山庄色紙和歌」（一六〇〇年頃）

# 【序章】百人一首の基礎知識

百人一首について、皆さんはどんな知識を持っていますか。一般には鎌倉時代初期に藤原定家（一一六二－一二四一）によって編まれた秀歌撰であるとされています。その百首の歌については、珠玉のような秀歌のオンパレードで、疑問の余地など一切ないと思っていませんか。しかしながら、それは一般読者や古典文学学習者を納得させるためのいわば方便なのです。専門的な和歌文学研究のレベルでは、今もってわからないことがたくさんあります。

そんなわけで本書では、百人一首を研究者の視点から概説してみました。もちろん資料を駆使して、実証的に論じることを心掛けていますが、だからといって安易に正解を一つに絞るような愚は犯さないようにしています。百人一首の成立や主題など、一口で言えるものではないからです。むしろ百人一首は、時代により人により解釈を変容させているのです。私はそれを再解釈という言葉で説明しています。そういう懐の深い作品だからこそ、時代を超えて多くの人々に愛好されているのではないでしょうか。

また百人一首は、決して和歌文学における珠玉の小品にとどまりません。百首という数がコンパクトであること、そして何よりも藤原定家の撰であることによって、歌道の流派争いのみならず、政治や教育の方便として巧みに利用されてきた歴史を有しています。そしてそのことが、必然的に百人一首の解釈にも反映しているのです。ですから百人一首の

歴史を展望すると、おのずから百人一首の担ってきた文化史的な役割も浮き彫りになってくるはずです。そういった点に言及しているのも、本書の大きな特徴の一つです。

本書は、百人一首の入門書のつもりで執筆しているので、わかりやすいように章分けを多くし、各章の中で必要と思われる基礎知識を説明しながらまとめてみました。一読して従来の説（皆さんの常識）と異なっている部分が少なくないはずです。そのため皆さんを惑わすことになるかもしれませんが、しかし決して奇をてらっているわけではありません。百人一首という作品自体が、そういう得体の知れないものだということを理解してください。

さあ、本書がどれだけ従来の本と違っているのか、それは読者の皆さんに判断していただくことにしましょう。

## 一、百人一首、常識のウソ

まず百人一首という名称から始めましょう。百人一首というとあまりにも有名なので、最初からそう呼ばれていたと思っていませんか。ところが古い資料には一切でてこないのです。百人一首という名の初出は、成立からおよそ百七十年以上も経った応永十三年（一



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

四〇六）書写の『百人一首抄』（『応永抄』宮内庁書陵部蔵）なのです。その序文の冒頭に、「小椋山庄色紙和歌／右百首は京極黄門小倉山庄色紙和歌也。それを世に百人一首と号する也」とあるのが最古の例でしょう。京都の冷泉家（定家の子孫）に所蔵されている百人秀歌はもっと古い写本ですが、百人一首という書名は出ていないので、初出例の変更はないようです。

ここで確認しておきたいのは、二条家流（定家の子孫の歌道流派の一つ）の注釈では最初から定家撰にまったく疑いを抱いていないということです。それどころか定家撰であることを前提として、積極的に権威づけを行っています。また、小倉山庄色紙和歌というのが正式名であって、百人一首というのは俗称だとしている点も見逃せません。どうやら小倉山庄色紙和歌の方が、百人一首より由緒ある名称であることにまちがいはないようです。

もっとも百人一首が、百という和歌の所収歌数を重視した表現であるのに対して、小倉山庄色紙和歌は小倉という所在、および色紙という形態を重視した表現ですから、両者は命名の基準（意味するもの）が相違しているのです。そうなると内容（所収歌）が同一であっても、色紙形態の小倉山庄色紙和歌と、目録形態の百人一首はきちんと使い分けるべきかもしれません。成立や伝来にしても、両者を厳密に分けて考えた方が良策と思われます。

ところで、百人一首という名称は、なんとなく奇妙ではありませんか。そのためか読み

くせの世界では「ひゃくにんしゅ」と発音されています。そもそも百人一首という書名を耳にした印象として、百人が一首を合作したようなイメージを思い浮かべてしまいます。類似したものに「一人百首」があります。これは一人の作者の歌を百首まとめたもの（百首歌）です。あるいはそこからの類推で、百人の作者の歌を各一首計百首まとめたものという命名なのかもしれません。それなら「百人各一首」の方がふさわしいのですが、そんな名称は聞いたこともありません。

これを「百人百首」とすると、今度は百人の歌を百首ずつ集めたもの（百×百＝一万）と誤解される恐れが生じてきます。それにしても落ちつかない名称です。というのも、百人の歌を一首ずつ集めた百首歌という形態そのものが、当時において非常に珍しいものだったからです。では『三十六歌仙』はどうですかという質問があるかもしれません。しかし『三十六歌仙』（本来は藤原公任（きんとう）の『三十六人撰』）では、六人の歌人は一人十首、三十人の歌人は一人三首（計百五十首）なのです。それが藤原俊成（しゅんぜい）（定家の父）によって改編された際も、三十六人の歌人による一人三首（計百八首）でした。それが一人一首（計三十六首）のいわゆる一首歌仙本になるのはずっと後のことで、むしろ百人一首の影響を受けているのかもしれません。

百人の歌ということでは、後鳥羽院（ごとばいん）の撰んだ『時代不同歌合』（文暦元年〈一二三四〉頃

成立）の方がずっと近い存在です。百人一首はなぜ百人なのかという疑問の答えはここにあります。では『時代不同歌合』はなぜ百人なのでしょうか。平安中期の公任の頃だったら、歌人は三十六人で事足りたのでしょうが、それから二百年も経っているのですから、とても間に合いません。そのため十八番（三十六人）が五十番（百人）に大幅に増加しているのです。それなら古代と近代各三十六人、計七十二人でもよかったはずですが、最終的に百人に定められています。ただし『時代不同歌合』は、一人一首ではなく一人三首（計三百首）でした。

定家はこの後鳥羽院の『時代不同歌合』に対抗する目的で、百人の一首歌仙本を考案したと考えられます。『時代不同歌合』で格下の元良親王と合わせられたことに対する不満・反撥もあったでしょう。意外かもしれませんが、百人一首という形態は、当時において非常に斬新なものだったのです。

## 二、現代に生きる百人一首

百人一首はその成立以降、勅撰八代集（『古今集』から『新古今集』まで）の啓蒙書として大きな役割を果たしてきました。その一方で、書道手本として重宝されたり、またかる

た遊戯へ変身したりと再解釈されつつ、近世庶民教育にも多大の影響を与えています。明治以降は、日本の国際化にも一役買っています。百人一首かるたは歌仙絵（作者像、似せ絵ともいう）を伴っていたため、手頃な美術品として外国人に喜ばれたらしく、何百セットとなく輸出されているからです。またF・V・ディキンズによって英訳されて以降、英語はもとより独語・仏語・中国語などに翻訳されており、日本文化の外国紹介という面でも重要なのです。

このように百人一首は、外国人からは注目されているのですが、肝心の日本では、それがあまりにも日常生活にとけ込んでしまっているものですから、かえってその重要性が見失われています。ですから、たとえ身近に百人一首に関するものがあったとしても、ほとんどそれを意識しないで看過している場合が多いようです。百人一首は、欧米におけるマザーグース（ナーサリー・ライム）の日本版と言えるかもしれません（落語にも17番「ちはやぶる」歌などが登場しています）。そこで私は、日常生活の中に潜んでいる百人一首グッズをチェックしてみました。するといたる所に百人一首が活用されていることがわかったのです。ここではその一部を紹介してみましょう。ただし美術館で販売されている小倉色紙の絵はがきやテレホンカードなどは、百人一首の正当な受け入れですから除外します。

かつて宝塚で、百人一首の歌の一部を芸名にするのが流行ったことがありました。天津

『はいからさんが通る』（講談社漫画文庫）より　©大和和紀

乙女・有馬そよ子・浦野まつほ・大江文子・沖野石子・小倉みゆき・門田芦子・雲井浪子・雲野かよ子・小夜福子・篠原浅茅・関守須磨子・滝川末子・巽寿美子・奈良美也子・三室錦子・三好小夜子・村雨まき子・雪野富士子・吉野雪子など、実に多くの名前がつけられています。優雅な百人一首は女性名にふさわしいのではないでしょうか。ところで皆さんはこの芸名からすぐに本歌がわかりますか。

小説では尾崎紅葉の『金色夜叉』（明治三十年発表）が最も有名ですが、最近のものとしては山村美紗の『百人一首殺人事件』もあります。現代版としてはコミックも見逃せません。古いところでは大和和紀の『はいからさんが通る』に崇徳院歌が使われていました

（前ページ参照）。その他、藤原栄子の『うわさの姫子』（てんとう虫コミックス）、新井素子の『通りすがりのレイディ』（集英社コバルト文庫）、同『絶句（下）』（早川書房）にも利用されています。里中満智子の『アリエスの乙女達』（講談社フレンドコミック）や、北条司の『シティハンター』（集英社）にも出てきます。特に崇徳院歌が多いのは、恋愛要素の強い女性マンガだからでしょうか。

本題の百人一首グッズとしては、次の三種が基本になります。

①百人一首という名称にかかわるもの
②百人一首歌を利用したもの
③かるたや絵を用いたもの

①としては、名古屋・松河屋老舗の商品に、ズバリ「銘菓百人一首」がありました。また味覚糖の「百人いっしょ」というキャンディー（現在は発売されていない）は、百人一首をもじったネーミングです。同様に大阪・茨木市の日本料理店の「百人一朱」という店名ももじりでしょう。大阪にあるしゃぶしゃぶ京料理の店の名など「百人一首」そのままで、その宣伝用マッチもあります。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong